

自画像

松浦敬親

第十二号のこの欄で、前川敏夫氏が「解らない俳句について」と題して論じている。

①地下室がなくて鮑の夜明けかな

②階段が無くて海鼠の日暮かな

③屋上が無くて蜩の真昼かな

前川氏は「この三つの句はいずれも意味不明だが、このうちのひとつは蛇笏賞を貰った有名な俳人の代表句といわれており、あとの二つは私がその句にならって勝手にことばをならべたものである。」と書いている。

しかし、この三句は本当に「意味不明」なのだろうか？

①は、たとえば家の台所。

鮑(あわび)をレジャーでたくさん密猟してきたが。地下室がないので隠し切れず、台所などに箱で置いたまま朝を迎えたのだ。鮑は夏の季語。

③は、たとえば会社の昼休み。

本当は屋上に出て気分転換をしたいのだが、屋上のないビルなので、水槽の蜩を見て癒されているのだ。 蜩は春の季語

また、①には「磯の鮑の片思い」を踏まえた解釈もある。

片思いの胸を熱くしながら、水槽に飼っている鮑。飼主はそれが性的な意味を持つこ

とを意識し地下室があれば隠しておきたいと思う。しかし、それがなくて夜明けを迎える羞恥心!

この鮑と比較すると③の蜆はまだ小娘だ。

場所も小学校かか中学校。昼休みに水槽の蜆の世話や観察をしながら、お喋りに夢中。

更に進めば、鮑と蜆は完全に象徴となる。こうなると水槽はもういない。

②の海鼠(なまこ・冬の季語)も、この三段階の解釈が可能だ。

しかし、この句で無いのは「階段」で階上と階下は存在する。

①と③は無いから行けない句だが②はあるけれど行けない句なのだ。

この点が大きく違う。

海鼠から見ると階上は陸地で、階下は海中だ。人間から見てもこれは同じだが、行く向きが違う。しかも人間は天国を考えたりするから、もっと複雑だ。

この場合は人間も海鼠も階下になる。そして、自分が海鼠と同じに見えたり、それよりは少し高等に見えたりする。逆に海鼠の行き方にあこがれたりもする。

勿論、海鼠を無意識の象徴と考えてもよい。この場合は階上に意識、階下に無意識。両方合わせて一人の人間だ。昼間は意識が優勢でも、夕暮には無意識が活発になる。そして、夜を迎え、やがて眠る。眠れば、もう圧倒的な無意識の世界だ。

階段は何処にあるのか? ②にはそんな実存の不安が表現されている。

人間は眠れば一匹の海鼠になる。この海鼠は自画像なのだ。

①の鮑や③の蜆も自画像になるが、どちらも殻に守られているので、海鼠ほど根源的

ではない。

私はこの海鼠の自画像を滑稽だと思う。

そして、この作者と同じ感受性を持っている自分をも滑稽に感じている。